



YAMAGA

近代の山鹿の
偉人たち
シリーズ

021

八千代座を設計、全盛期を支える（一八五九〜一九四〇）

木村亀太郎

明治四十三年に建設された八千代座の設計者で総支配人。青年期に長崎に渡り、測量技師として佐世保の軍港建設に従事する。そこで建築に関する技術を取得し、帰郷後、鹿本鉄道山鹿駅本社、山鹿小学校校舎、山鹿高等女学校校舎、薬師堂などを設計した。

芝居小屋、八千代座建設は亀太郎の集大成とも言える事業。設計にあたっては全国の芝居小屋を丹念に見学し、勉強のため上海の劇場も視察した。そうして和洋折衷の威風堂々たる芝居小屋が完成した。画才もあり八千代座の天井広告の下絵を描いた。また、灯籠師としての腕も一流で、近世の名人と言われた木村仙太郎に師事した。

絵を描き、建築や灯籠制作、八千代座の興行などで多彩な才能を発揮したことから、山鹿のレオナルド・ダ・ヴィンチといわれる。

幼・青年時代

木村亀太郎は、安政六年（一八五九）八月二十四日、菊池川に架かっていた旧山鹿大橋近くの旧山鹿町一七七六番地（下町）の廻船問屋川口屋の父銀八、母モミの長男として生まれました。

当時の山鹿は菊池川の水運と旧豊前街道を利用した水陸交通要衝の地で、県北一の商業都市、温泉場として賑わっていました。旧山鹿大橋上流には船着場があり、ここから山鹿の良質な米や清酒などが運び出されていました。

亀太郎の子供のころの記録は残念ながら残っていません。しかし、のちに山鹿灯籠を制作したり、八千代座の天井広告の下絵を描いていることから推測すると、手先が大変器用で、小さいころから絵にも大変興味があったことがうかがえます。おそらく、絵を描いたり、物を作ったり、近くの菊池川で遊んだりして、多感な少年期を過ごしたことでしょう。

明治十一年（一八七八）、亀太郎は十九歳の若さで家督を相続しました。亀太郎の下に弟が三人、妹が二人おり、一家の大黒柱になったわけです。父銀八は早く亡くなったと推測されます。

亀太郎は青年になると測量技師見習いとして測量を学び、土木や建設業界への一歩を踏み出しました。

明治政府は西欧諸国に対抗するため富国強兵政策を実施し、海軍充実の軍港整備を図ります。九州では長崎県の大村湾（佐世保湾）が候補地としてあげられ、明治十六年から調査・測量が行われました。そして、明治十八

年、長崎県の佐世保に軍港が建設されることになりました。翌明治十九年から軍港建設が始まっていますので、おそらく、明治十六年ころから亀太郎は佐世保に行き、測量技師として佐世保軍港建設に従事していたと考えられます。



菊池川、山鹿大橋上流の船着場。このすぐ近くが亀太郎の住まい【大正8年】

ちょっとコラム①

●佐世保の海軍軍港編津工事

亀太郎が測量技師として従事した佐世保の軍港設置はいつものように行われたかを『佐世保の歴史』から紹介します。

ペリー来航以来、明治政府にとって海防は緊急問題でした。海軍充実と軍港整備の必要が課題で、明治十六年大村湾（佐世保湾）などの候補地で調査、測量が行われ、その結果、明治十八年に佐世保に軍港設置が決定されたそうです。当時の佐世保村は人口四千人の小さな村でしたが、周辺の村を巻き込んで急激な変貌を遂げ、軍港都市、消費都市になって行きます。明治十九年に西海鎮守府設置が公示され、軍港に必要な諸施設の建設が始まり、省や県から送られた軍人や役人が、周辺や各県から集められた技師や人夫を急がせて工

事を進め、満三年を経過して明治二十年に第一期工事が総工費百万円で終了しました。明治二十二年には横浜から第一期入団兵を迎える一方、軍港建設と並行する形で計画的な市街地造りが進められたのです。佐世保市は明治三十二年には人口四万人を超え、佐世保市になりました。

工事が開始された明治十九年は亀太郎が二十七歳の時になりますが、どのような形でいつ測量見習いとして工事に関わり、いつまで佐世保にいたのか、残念ながら資料が残っていません。しかし、軍港と新しい町づくりのために多くの技術者が集まり、その中で貴重な経験を積む機会を得、さらに様々な分野の技術や経験を持った人々との出会い、親交を得て帰郷したと思われまます。佐世保軍港建設で得た経験、人脈が後に生かされました。

山鹿での設計、建築の仕事の多くが明治末期から始まっていること、また、測量だけでなく、役場や学校の校舎や駅舎、芝居小屋などの大規模な建築物の設計に力を発揮したところをみると、佐世保では軍港以外の諸施設の建設にも長く関わっていた可能性が大きいとも推測されます。

測量見習いの三年程度の経験では、いかに器用人でも八千代座の設計を始めとした多くの実績を残すことは難しいのではないのでしょうか。もしかすると、後の八千代座や東雲座（熊本市）、椋座（菊池市）建設につながる佐世保の劇場建築に関わったことも考えられないことではあり

壮年時代

明治二十年、亀太郎が二十八歳のとき、佐世保軍港の第一期工事が終了します。そのあと、佐世保では市街地の整備が進み、明治三十二年には人口四万人を有す軍港都市、佐世保市として生まれ変わりました。

亀太郎がいつ帰郷したかは定かではありませんが、軍港完成後、山鹿に戻った亀太郎は、廻船問屋や八千代座の支配人として、また、山鹿周辺の学校、劇場の設計・建築に携わるなど、精力的に仕事をこなしました。そのほか、近世の灯笼制作の名人といわれた木村仙太郎に師事して灯笼制作を学び、山鹿灯笼も作っています。



八千代座こけら落とし、木戸口右側の両腕を広げた和服姿の男性が51歳の亀太郎【明治44年】

亀太郎は画才があり、建築技術や興行など多くの分野で力を発揮しました。亀太郎は、「モナ・リザ」制作や科学技術分野でイタリアのルネサンス期に活躍したレオナルド・ダ・ヴィンチ（一四五二〜一五一九）にたとえ、「山鹿のレオナルド・ダ・ヴィンチ」といわれています。

亀太郎は次のような建物を設計しました。鹿本鉄道山鹿駅本社、鹿本郡畜産場、鹿本製糸株式会社寄宿舎、山鹿尋常高等小学校第一校舎、八幡村役場、隈府町（現在の菊池市）「桜座」、熊本市「東雲座」、山鹿高等女学校校舎・宿直室、山鹿町薬師堂、中富村役場

また、亀太郎の盟友が、肥後米や清酒の改良に尽力し、広く輸出することで山鹿の近代の商工業の発展に寄与した本田喜久八（一八五九〜一九四三）でした。喜久八は亀太郎と同じ年で、家も三軒しか離れておらず、小さいころから亀太郎の遊び友達でした。

喜久八は、米問屋を営み品種改良によって肥後米の名声を高めただばかりでなく、明治二十九年には、本田酒造場（現在の千代の園酒造）として酒造会社を設立し、肥後米を使った酒造りに取り組み、数々の品評会で優秀賞を受賞しています。喜久八は商才に優れ、議員を務めるなどして要職につきませんが、亀太郎は建築技術や興行などの分野で活躍しました。

芝居小屋八千代座の設計と経営

八千代座の設計は、亀太郎の集大成と言えるかもしれません。設計にあたって亀太郎は、東京、大阪、下関、長崎、熊本などの全国の芝居小屋を丹念に見学し、さらに、上海にも渡って建築の勉強に励みました。特に熊本市の大和座と東京の歌舞伎座に八千代座の原形を求め、大和座には大工棟梁の泉仁平と何度も足を運



亀太郎が描いた八千代座の天井広告原画、本田喜久八商店（現在の千代の園酒造）

年表 History

安政六年 (二八五九)	八月二十四日、旧山鹿町の下町の廻船問屋川口屋、父木村銀八、母モミの長男として生まれる。
明治十一年 (二八七八)	十九歳で家督相続する。このころ測量技師見習いとして測量を学ぶ。
明治十六年 (二八八三)	軍港建設に先立ち調査・測量が大村湾(佐世保湾)で始まり、このころ長崎に行き、測量に携わる。
明治二十年 (二八八七)	佐世保の軍港が完成したこの時期、もしくはこれから数年後、山鹿に帰郷する。
明治二十二年 (二八八九)	山鹿に帰ってきてからは、廻船問屋の経営、学校や役場などの公共施設を建設、灯籠師の木村仙太郎に師事し、灯籠師としても活躍。

明治四二年 (二九〇八)	山鹿尋常高等小学校第一校舎を設計した。
明治四三年 (二九一〇)	五十歳のとき八千代座を設計する。十二月に完成。
明治四四年 (二九一一)	八千代座の大勘定(総支配人)として、八千代座経営の大番頭を務める。
昭和十三年 (一九三三)	鹿本鉄道山鹿駅本社設計。この年の十二月三十一日に鹿本鉄道の山鹿・植木間が全線開通した。
昭和十五年 (一九四〇)	七月十二日、八十二歳で亡くなる。

近代の山鹿の偉人たち 021

八千代座を設計、全盛期を支える 木村 亀太郎

平成 24 年 3 月 発行

山鹿市教育委員会 教育部 文化課
〒861-0501 熊本県山鹿市山鹿 156-3
TEL 0968-43-1691

編集委員

執筆 木村 理郎・吉岡 隆
編集 井上 欣也

参考文献

『山鹿市史』下巻(山鹿市)
『重要文化財指定記念誌八千代座』(山鹿市)
「故田中祐一郎氏からの聞き取り調査」
『新補山鹿市史』(山鹿市)
『新山鹿双書六 鹿本鉄道』(山鹿市)

ちょっとコラム②

● 灯籠制作と建築技術

亀太郎は近世の灯籠制作の名人といわれる木村仙太郎の弟子でした。

仙太郎の養子で時計修理の傍ら養父に指導を受け、灯籠師の第一人者となり、山鹿名誉市民、熊本県近代文化功労者の故松本清記氏は、灯籠制作と建築技術について以下のように語っています。(『山鹿灯籠』「灯籠師の話から」「松本清記翁のはなし」抜粋)

「灯籠は建築技術の外に絵の心得である。唐草模様などよく自分で書いたものだ。三寸間から四寸間または二寸五分二寸間に変えるときは、隅木から割り直さねばならない。それから垂木が何本と割り出せる。それを隅木はそのままのもの

びました。
そうして設計された八千代座は、一見すると江戸時代の歌舞伎小屋の様式を引き継ぐ伝統的な和風建築のようですが、屋根裏のトラス構造、客席の勾配、柱に鉄の鋼管を使うなど、洋風建築の長所が随所に使われている和洋折衷の建物となりました。
そのほか、八千代座を象徴するものに、天井広告画があります。芝居小屋の天井と欄間に広告絵を張り、広告収入を得ることを思いついたのが、亀太郎です。亀太郎は看板屋に発注する前の広告の下絵を描きました。現存するのは三十二枚で、平成の大修理ではその下絵を基に建設当初の広告画が復原されました。

八千代座のこけら落とし公演は、明治四十四年(一九一〇)一月十一日から行われた松嶋屋一座による大歌舞伎公演でした。請元(興行主)は村上千代吉、亀太郎は取締を務め、二十日間にわたって行われました。公演にはたくさんの山鹿の町民が訪れ、連日大入り満員だったそうです。
以後、亀太郎は、明治四十四年のこけら落としから大勘定(総支配人)として、八千代座経営の大番頭を昭和十三年まで務め、八千代座の全盛期を支えました。亀太郎には七歳年下の妻のツマの間に、三男二女の子供たちに恵まれました。そして、家族に見守られながら、昭和十五年(一九四〇)七月十二日に八十一歳で亡くなりました。

を使っているのがあるから困る。また軒の勾配など五寸なら破風作りが六寸と決まっている。これは型をやっているからその型通りつくればよいが、間の寸法を変えた場合は勾配も違わせねばならない。大工同様の設計、建築知識がいるわけである」
「師の木村仙太郎は彫刻絵画両方面にかけて堪能だった。灯籠の作り方を改革したのはこの人である。昔は破風の勾配など目測で計って作っておったが、建築技術から割り出して何寸間に勾配はどれだけと割り出した」
「明治三十四年前後の灯籠は、今から見れば、いずれも大型で倍近くもあったでしょう。作る人も多く、父のところへは木村亀太郎、高田峯五郎、井口繁次さんなどが出入りさ

れ、みな一流でしたよ」
このように、灯籠制作の技術と建築技術とは密接な関係があることが分かります。
亀太郎は建築に關してはずぶの素人でしたが、生来器用で八千代座の設計を任せられたといわれています。しかし、山鹿市の公共的な建築物(学校・役場)や鹿本鉄道の駅舎、当時の山鹿町役場から依頼されて薬師堂を設計した実績を考えると、特殊な建築知識にも精通した経験を積んでいたことが推測されます。
亀太郎の仕事の集大成である八千代座建設に至っては、山鹿灯籠と建築の両面の技術が相互に生かされた例と言えるでしょう。